

「巡検会報告」

寛政大津波，熊本側の波先跡巡り（その2）

本多 栄喜¹⁾

1. はじめに

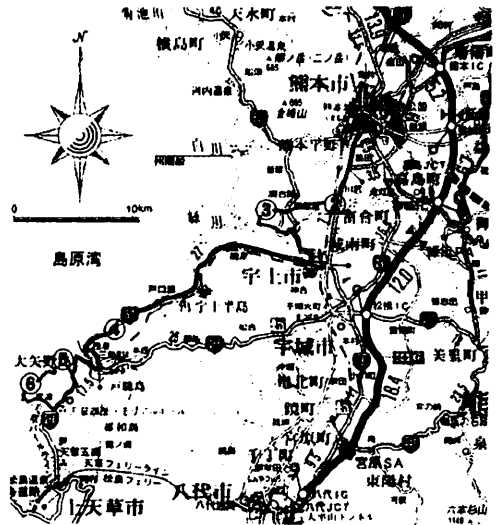
寛政大津波，熊本側の波先跡巡りの巡検会が平成19年6月3日に堀川治城先生の案内で行われた。その参加者は23名であった。今回の巡検会での観察地点とそこでの観察内容については以下に示すとおりである。

なお，寛政大津波については，堀川治城著「寛政大津波，熊本側の波先侵入（防災意識高揚の資料として）」（熊本地学会誌 No. 140）があるので，詳しくはそれを参照して下さい。

寛政大津波は，1792年5月21日（寛政4年4月朔日）に，島原半島にある眉山が崩壊し，山体をつくっていた土砂が海に流れ込んだことによって発生した大津波のことである。眉山崩壊は多くの文献から，酉の刻（午後8時）過ぎに起こり，熊本側にお津波が押し寄せてきたのは午後8時半過ぎであったことが分かっている。当日は開夜，大潮ということもあり，各種古文書の記録にも直接目撃されたものは少ない。古文書等に述べられている津波被害の状況の中から，より信憑性の高い記録をとりあげることによって，寛政大津波についてのとりまとめが後世になされている。寛政大津波では島原及び熊本地方合わせて1万5千余人の死者が出ており，

この地変は「島原大変肥後迷惑」と呼ばれている。

2. 観察地点とそこでの観察内容



① 長六橋

白川では，津波が長六橋まで遡上した。その長六橋をバスの車窓から眺めた。津波は3尺（=90cm）。

② 川尻の加勢川沿いの藩港

緑川・加勢川では，当時藩港として栄えていた川尻港船着場の御蔵前石壇3段まで津波が上がったそうである。

③ 川尻～中緑～錢塘～川口，特に二町付近

浸水境界域をバスの車窓から観察した。旧天明町の二町付近では津波の高さは6m以上であったと考えられる。

④ 宇土市太田尾・(写真一)

津波の遡上があったことを後世に伝えるための津波境石を観察した。津波境石は当時、少し離れた別の場所に置いてあったが、現在は人目に付くように道路沿いに置いてある。津波高は22.5m。

津波境石の観察後、三角西港にて昼食をとった。



写真一 太田尾の津波境石(津波高22.5m)

⑤ 上天草市大矢野町白瀧

「浜岡兼松氏敷地は浸水したが，その上の旧山口氏宅敷地には達しなかった」という地元伝承の残る白瀧に足を運んだ。浸水標高は9.9m。



写真二 大矢野島から見た島原半島

⑥ 上天草市大矢野町(大手原・鳩乃釜)

大手原・鳩乃釜で津波の遡上した地点を観察した。

3. おわりに

今回の巡検会では、各種古文書や波先石(津波留石・津波境石)などをもとに検討された話で、難しい内容であるはずなのに、素人の私でさえ寛政大津波について理解することができた。津波はずっと以前のことであるのに、津波があったことを示す津波石を確認し、そして被害の記録が残っている場所へ足を運ぶことで、こんな場所にまで津波が到達するのだと津波の怖さを体で感じた。津波の高さは地点によって異なっているが、その違いは地形的特性や津波の返し波などの要素が複合的に関係し合うことで生じることが分かった。

また、このような恐ろしい津波が身近な地域で起こっていることを考えると“防災”を意識せずにはいられなくなった。スマトラ島沖地震により発生したインド洋大津波のことは誰もがテレビ等の報道によって知っており、津波の恐ろしさを知らないはずはない。しかし、そのような津波は他人事で、まさか身近な地域で起こっていたり、これから起こったりするかもしれないということに、全く考えが及ばない人が多いのではないかと思う。過去に身近な地域で起こった寛政大津波のことを知ることは、特に有明海周辺に住む人々にとって、防災意識の高揚を図るために大変重要であると考え、教師など地域素材をもとに研究や教育実践を行う者が中心となって、様々な機会に多くの人へ伝えていくことが大切であると思った。

最後に、今回の巡検会を有意義なものにするために、予備調査・資料づくりから現地での説明など何から何まで骨折りに尽くして下さった堀川治城先生に感謝の意を表し、巡検会の報告とする。